様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１３５７７

研究課題名（和文）汎用的能力の育成を可能にする歴史教育固有のコンピテンス・モデル開発研究

研究課題名（英文）A Study of the Development of a Competency Model for Generic Competences specific to History Education

研究代表者

宇都宮　明子（Utsunomiya, Akiko）

島根大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：４０６１１５４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、ドイツの一般・歴史教育学におけるコンピテンス・モデルの比較考察から両教育学研究の相関性や協同性の解明を通して、日本の教育学研究へのドイツモデルの援用を考察することで、汎用的能力を育成する歴史教育固有のコンピテンス・モデルを開発することを目的とする。
　平成28年度はドイツの両教育学におけるコンピテンス・モデルの比較分析、平成29年度は日本とドイツの両教育学におけるコンピテンス研究を比較する研究を実施した。平成30年度はドイツの歴史教育学研究におけるコンピテス・モデルを個別に検討し、令和１年度にそれらのモデルの比較検討から日本の歴史教育固有のコンピテンス・モデルを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の意義の第１は、ドイツの一般・歴史教育学研究におけるコンピテンス・モデルを包括的・総合的に明らかにしている点である。第２は、ドイツのコンピテンス・モデルを一般・歴史教育学研究の両面から考察している点である。第３は、一般教育学研究と歴史教育学研究の両面から日本の歴史教育固有のコンピテンス・モデルを開発した点である。第４は、開発したコンピテンス・モデルに基づいて歴史授業を開発した点である。歴史教育固有のコンピテンス・モデルとそれに基づいた歴史授業の開発が本研究の独自性であり、挑戦的な取り組みとなっている。

研究成果の概要（英文）：This study develops a competency model for Generic Competences specific to history education by analyzing the application of a German model to Japanese pedagogical research. The model draws on the findings of comparative studies of competency models used for general education and history education in Germany and highlights correlations and the level of cooperation between the two disciplines.
We conducted a comparative analysis of the competency models applied to general education and history education in Germany in 2016. In 2017, we completed a second study that compared the competency research on these disciplines in Japan and Germany. We independently investigated a competency model for research on history education in Germany in 2018. Thereafter, in 2019 we conducted a comparative study of these models to develop a competency model specific to history education in Japan.

研究分野：社会科教育学

キーワード：コンピテンス・モデル　21世紀型能力　汎用的能力　日本とドイツの歴史教育学　日本とドイツの一般教育学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本の一般教育学では，海外のコンピテンスに基づく教育改革の研究が盛んに実施され，日本独自の文脈から新たな能力概念を提起し，今後の教育の展望を示す研究が進展している 。21 世紀型能力は研究の 1 つの結実点で，アウトカム志向のカリキュラムへの転換の可能性を拓くものといえる。しかし，カリキュラムの転換が反映されるべき教科レベルをみると，例えば，社会科独自のコンピテンスといったものは確定されていない。一方，ドイツでは教科レベルのコンピテンス・モデルを提起する研究が精力的になされ，例えば，歴史科をみると，各州の歴史科学習指導要領はコンピテンス・モデルに基づくアウトカム志向カリキュラムへと転換を遂げている。本研究は，一般教育学研究におけるコンピテンス・モデルを踏まえた教科コンピテンスを歴史教育の観点から確定することを図るものである。アウトカム志向カリキュラムを実現しているドイツの歴史教育学から日本の歴史教育学への有益なモデル転用を図ることができ，カリキュラム改革への展望を拓く研究になると考えたことが，本研究を構想した経緯である。

２．研究の目的

本研究は，①ドイツの一般教育学と歴史教育学におけるコンピテンス・モデルの比較考察からその相関性や両教育学研究における協同を明らかにし，②その相関性や協同の日本の両教育学研究への適用可能性を考察し，③汎用的能力を育成する歴史教育固有のコンピテンス・モデルを開発することを目的とする。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために，研究期間内に以下の研究方法を採用した。

【28 年度】

・ドイツの一般教育学・歴史教育学におけるコンピテンス・モデルの分析研究

第１に，ドイツの一般教育学や歴史教育学におけるコンピテンス・モデルに関する文献・各州学習指導要領，一般教育学者や歴史教育学者へのインタビューに基づいて，両教育学研究におけるコンピテンス・モデルを分析し，その能力枠組みを解明する。第２に，両コンピテンス・モデルの能力枠組みにみられる相関性を明らかにする。第３に，両コンピテンス・モデルにみられる相関性は，両教育学研究のどのような協同関係から生じているのかを分析することで，その協同関係を究明する。第４に，これまでの考察に基づき，ドイツにおける両教育学研究にみられる協同関係がコンピテンス・モデルの実現に果たした成果と課題を究明する。

【29 年度】

・日本とドイツの一般教育学におけるコンピテンス研究の比較研究

第１に，日本の一般教育学におけるコンピテンス・モデルを文献や各州学習指導要領や政策担当者へのインタビューから分析し，その能力枠組みを解明する。第２に，その能力枠組みに基づいて，両国のコンピテンス・モデルを政策担当者と協議の上で比較検討する。第３に，両国それぞれのコンピテンス・モデルで育成を図る資質や能力の共通性や相違性を検討する。

・日本とドイツの教育学研究の比較研究

第１に，両国の一般教育学研究におけるコンピテンス・モデルで育成を図る資質や能力の共通性や相違性を勘案しながら，28 年度に明らかにしたドイツの両教育学研究における協同関係の日本の教育学研究への適用可能性を検討する。第２に，その適用可能性とともに，日本とドイツのコンピテンス・モデルの相違性も考慮し，日本独自の両教育学研究における協同関係を考察する。

【30 年度】

・ドイツの一般・歴史教育学におけるコンピテンス・モデルの理論的考察

ドイツの一般・歴史教育学者との協議のもとで，一般・歴史教育学研究におけるコンピテンス・モデルを個別的に検討する。

【令和１年度】

・日本の歴史教育固有のコンピテンス・モデル開発研究

第１に，30 年度の個別に検討した一般・歴史教育学研究におけるコンピテンス・モデルを包括的・総合的に分析し，比較する。第２に，第１の成果を踏まえ，ドイツの一般・歴史教育学研究におけるモデルの日本への適用可能性と実現可能性を考察することで，日本独自の両教育学研究における協同関係に基づき，研究代表者，研究分担者，研究協力者の協議を経て，歴史教育固有のコンピテンスを設定し，コンピテンス・モデルを開発する。

４．研究成果

(1) ドイツ一般教育学研究におけるコンピテンス・モデルに関する理論的考察

ドイツ一般教育学研究でコンピテンス・モデルが開発される背景には，とりわけ，2000 年代初頭以降の教育改革がある。各州文部大臣常設会議（KMK）は，2003－04 年に教育のクオリティ保証を具体的に前進させる有力なツールとして，言語系教科と理数系教科を対象に国共通の教育スタンダードの導入を決議した。この教育スタンダードの導入を節目とする学力改革は，教育の質保証・質開発を実質化するための構造的パラダイム転換を意図していた。ドイツにおける過去約 15 年の教育改革は，マクロな次元では教育スタンダードやコンピテンス志向の授業を導入し，ミクロな次元では授業（学校）開発をキーワードとする「クオリティ開発」の考え方を着実

に浸透させた。
本研究では，上記の教育改革，学力改革に基づいて，一般教育学研究ではコンピテンス・モデルがどのように構想されてきたのかを，諸州共同版基礎学校学習指導要領，ノルトライン・ヴェストファーレン州基礎学校 2008 年版学習指導要領，テューリンゲン州基礎学校 2010 年版学習指導要領を事例として検討した。諸州共同版基礎学校学習指導要領のコンピテンス・モデルは，現代社会に求められる学力モデルで示されたコンピテンス・ファクターに依拠したモデルであることを考察した。ノルトライン･ヴェストファーレン州基礎学校 2008 年版学習指導要領では，教科等で「獲得した知識・技能の効果的な活用の必要条件になる」とされる包括的なコンピテンスの獲得が目指されていることが判明した。テューリンゲン州基礎学校 2010 年版学習指導要領は，生徒がベンチマークごとに身に付けることが期待されるコンピテンスを明示し，「学校入学期より，教科特有のコンピテンスとともに，教科の枠を超えたコンピテンス（überfachliche Kompetenz）を体系的かつ構築的に獲得させる」 ためのカリキュラムとして構成されていることを究明した。
ドイツにおける教育改革の動向と一般教育学研究におけるコンピテンス・モデルを考察し，2 期に亘るカリキュラム改革でコンピテンス・モデルが教育スタンダードの導入においても，授業のクオリティ改善においても中核的な役割を担っており，ドイツではコンピテンス・モデルは教育改革を進める駆動力となっていることを解明した。

(2)ドイツ歴史教育学研究におけるコンピテンス・モデルに関する理論的考察
代表的なコンピテンス・モデルとして，ドイツ歴史教師連盟，H．-J.パンデル，P．ガウチ，FUER 歴史意識プロジェクトのコンピテンス・モデルを検討した。ドイツ歴史教師連盟のコンピテンス・モデルでは，2006 年版と 2011 年版を比較し，2011 年版は，2006 年版のコンピテンスや到達水準が学校教育現場で受け入れられず，各州の学習指導要領に影響を及ぼすことができなかったことに対応するため，明確な目標のもとでコンピテンスや到達水準を設定することで，学校教育現場における構成主義歴史学習を具体化する道筋を明らかにしていることを検討した。H．-J.パンデルのコンピテンス・モデルは，7 つの次元からなる歴史意識を通して問題解決能力を育成することを目的に，史資料読解コンピテンス，解釈コンピテンス，語りコンピテンス，歴史文化コンピテンスからなるモデルとして構想されていることを示した。P.ガウチのコンピテンス・モデルの検討から，歴史授業の中心的な学習目標（語りコンピテンス）の設定→学習目標を実現する上での課題の抽出→課題を克服するための学習目標の下位目標の設定という過程を経て，「時間における変動の認知コンピテンス」，「歴史的史資料や描写の解明コンピテンス」，「歴史の解釈コンピテンス」，「時間経験の方向性コンピテンス」という４つの下位コンピテンスからなる語りコンピテンスとしてコンピテンス・モデルが構想されていることを明らかにした。FUER 歴史意識プロジェクトのコンピテンス・モデルは，歴史的思考過程における操作から導かれる３つのコンピテンスと，歴史的思考過程の基盤を形成する１つのコンピテンスで構成され，歴史的思考過程の促進と歴史意識の育成を図る構造になっていることを検討した。
次に，各州の歴史科学習指導要領を取り上げ，各指導要領がそれぞれどのような目標とコンピテンスを設定しているのかを検討した。各州の歴史科学習指導要領の教科目標とコンピテンスの分析から，一般教授学の理論，ヤイスマンの歴史教育論，リューゼンの歴史教育論，パンデルの歴史教育論，FUER 歴史意識プロジェクトの歴史教育論という各州学習指導要領が依拠する５つの理論的基盤を導いた。これより，各州は依拠する理論的基盤が異なっており，選択した理論的基盤に基づいて教科目標とコンピテンスが確定されるため，コンピテンスが多様になっており，歴史科固有のコンピテンスとは学習指導要領で設定されることで限定的に集約されるものではなく，根拠づけられた確かな理論的基盤に基づいている限りで多様に想定されるものであると判断することができた。
以上の考察から，ドイツ歴史教育学研究では理論的根拠に基づいて多岐に亘るコンピテンス・モデルが構想されるとともに，歴史科学習指導要領では一般教育学研究や歴史教育学研究におけるコンピテンス・モデルを理論的基盤として各州独自の判断でコンピテンス・モデルを選択していることを明らかにした。

(3) 日本の歴史教育固有のコンピテンス・モデルの開発に向けた理論的・実践的考察
まず，(2)で考察したドイツ歴史教育学研究におけるコンピテンス・モデルの特徴から，コンピテンス・モデルを開発するための方策を解明した。(2)で明らかにしたドイツ歴史教育学研究におけるコンピテンス・モデルの特徴から，日本の社会科学習指導要領をインプット志向からアウトカム志向へと転換するために考察すべき論点を明確にした。
第１が，コンピテンス・モデル導出の根拠である。モデルの構築に際し，歴史学の学問的成果に依拠するのか，歴史教育学の教育目的に依拠するのか，歴史授業という実践に依拠するのかという論点である。第 2 は，コンピテンス・モデルの汎用性のレベルの設定である。学校での歴史授業に限定したモデルにするのか，幼児期から成人期に至る歴史との関わりにまで影響するモ

デルにするのかという論点である。第 3 は，コンピテンス領域やコンピテンスの設定である。モデルの理論的構想に基づいてどのようなコンピテンス領域を設定するのか，それらコンピテンス領域を有効に機能させるためにどのような下位コンピテンスを設定するのか，これらコンピテンス領域やコンピテンスをどのような関係性で捉えるのかという論点である。第 4 は，コンピテンス・モデルの構造である。コンピテンス領域からなるコンピテンス領域モデルとするのか，学年段階修了時の到達水準を想定したコンピテンス発展モデルとするのか，領域全体の到達規準まで想定したコンピテンス構造モデルとするのかという論点である。

次に，これらの論点を考慮しながら，ドイツ歴史教育学研究において提案される代表的なコンピテンス・モデルや，事象コンピテンス，自己コンピテンス，社会コンピテンス，方法コンピテンスからなる一般教育学研究における代表的なコンピテンス・モデルの持つ日本の歴史教育固有のコンピテンスへの適用可能性と実現可能性を考察した。ここでは，日本の歴史教育学研究と歴史学研究という日本の文脈でのコンピテンス・モデルの考察を実施した。日本の歴史学習における学習活動の根拠となっているのが，歴史学の営みである。遅塚忠躬の論考に基づいて，歴史学の営みを，明確な問題関心，問題設定のもとで史資料を選択し，事実を認識し，その認識に基づいて明らかにした意味関連から仮説を設定し，歴史像を構築するという主観的・主体的な歴史への取り組みと捉えた。

歴史学の営みを踏まえ，問いコンピテンス，史資料読解コンピテンス，史資料解釈コンピテンス，語りコンピテンスを導き，これらのコンピテンスを日本の歴史教育固有のコンピテンスとした。さらに，教育学の営みから，自身で問題を設定し，史資料を選択し，事実認識や意味解釈を通して歴史像を構築するという主体的な学びを促進する自己コンピテンス，これらの学びを他者との対話による協同を通して深い学びへと導く社会コンピテンスを導いた。

本研究では，問いコンピテンス，史資料読解コンピテンス，史資料解釈コンピテンス，語りコンピテンス，自己コンピテンス，社会コンピテンスからなるコンピテンス・モデルを日本の歴史教育固有のコンピテンス・モデルとし，図で示したのが，図１である。

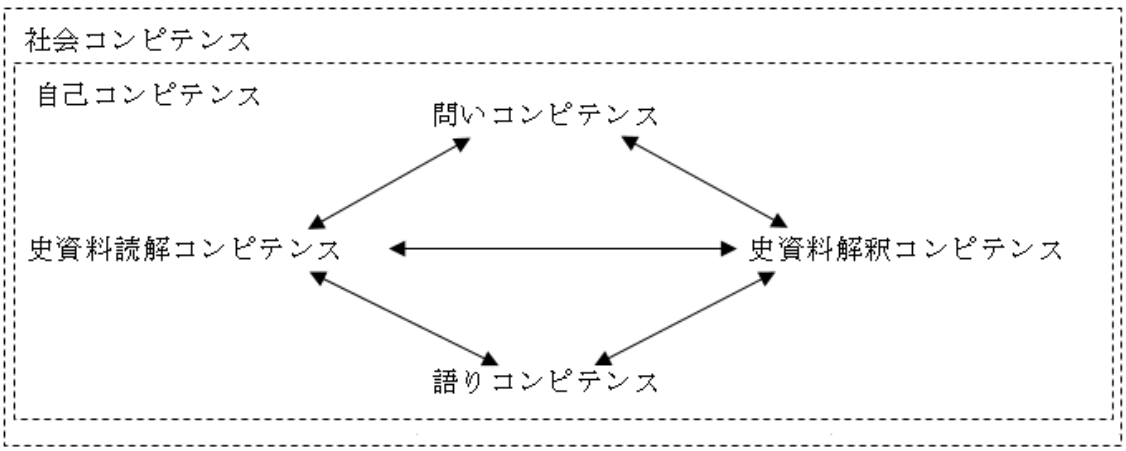


図１　日本の歴史教育固有のコンピテンス・モデル

図１の日本の文脈から導かれたコンピテンス・モデルはドイツの一般・歴史教育学研究におけるコンピテンス・モデルとかなり親和性が高く，ドイツのコンピテンス・モデルは日本の歴史教育において適用可能性と実現可能性を備えていると考えられる。そのため，図１で示したコンピテンスからなるコンピテンス・モデルはドイツの一般・歴史教育学研究の文脈からみても有意義なモデルであると判断し，本研究で提案する日本の歴史教育固有のコンピテンス・モデルとした。そして，提案したコンピテンス・モデルに基づいて，中学校社会科歴史的分野では単元「中世社会から近世社会への移り変わり」，高等学校地理歴史科日本史探究では，単元「近世への転換と江戸時代の特色」を設定し，歴史授業の開発を実施した。開発授業は，平成 28 年度～令和１年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「汎用的能力の育成を可能にする歴史教育固有のコンピテンス・モデル開発研究」研究成果報告書で公表した。

(4)研究の総括

ドイツの一般・歴史教育学研究におけるコンピテンス・モデルに関する理論的考察，日本の歴史教育固有のコンピテンス・モデルに関する理論的・実践的考察からなる本研究の意義は以下の点である。

第１は，ドイツの一般・歴史教育学研究におけるコンピテンス・モデルを包括的・総合的に明らかにしている点である。本研究は教育学者が構想したコンピテンス・モデルやドイツ全州の歴史科学習指導要領におけるコンピテンス・モデルを比較考察することで，現時点で最も有効なコ

ンピテンス・モデルを究明するといったコンピテンス・モデルの総括的な検討を実施した。

第２は，ドイツのコンピテンス・モデルを一般・歴史教育学研究の両面から考察している点である。本研究では一般教育学研究におけるコンピテンス・モデルの検討を踏まえた上で，歴史教育学者が構想したコンピテンス・モデルや各州歴史科学習指導要領におけるコンピテンス・モデルを分析することで，一般教育学研究のモデルが歴史科のモデルに及ぼす影響とともに，歴史科という教科モデルとしての独自性も明らかにした。

第３は，一般教育学研究と歴史教育学研究の両面から日本の歴史教育固有のコンピテンス・モデルを開発した点である。日本の歴史学や教育学といった歴史教育学研究の関連学問体系の文脈からコンピテンス・モデルを構想するとともに，ドイツの両教育学のコンピテンス・モデルとの比較考察に基づいて，歴史教育への適用可能性と実現可能性を検討することで，コンピテンス・モデルを開発した。

第４は，開発したコンピテンス・モデルに基づいて歴史授業を開発した点である。理論的考察に基づいて構想したコンピテンス・モデルの実践レベルでの妥当性を検証するため，中学校社会科歴史的分野，及び高等学校日本史探究の歴史授業を開発した。

本研究で考察した通り，ドイツの各州歴史科学習指導要領はいずれもコンピテンス・モデルを設定し，学年段階で育成すべきコンピテンスを明確に提示している。それに対し，日本の学習指導要領ではコンピテンス・モデルが設定されることなく，従来通りの学習内容中心の構成のままでコンピテンス志向への転換を謳っている。この現状を踏まえると，新学習指導要領に依拠してもコンピテンス志向の歴史授業は実現不可能であると考えざるを得ない。歴史的分野独自のコンピテンス・モデルと各コンピテンスでの能力枠と到達水準の設定があってこそ，コンピテンス志向が実現可能となる。ドイツのコンピテンス・モデルから明らかなように，モデルは多様に想定されうる。どのようなモデルが社会科各分野のモデルとして最適で有効なものであるのか，コンピテンス・モデルを巡る議論が日本の社会科教育研究における喫緊の課題であると考える。

＜引用文献＞

①原田信之『ドイツの協同学習と汎用的能力の育成－持続可能性教育の基盤形成のために－』あいり出版，2016 年。
②原田信之編著『カリキュラム・マネジメントと授業の質保証－各国の事例の比較から－』北大路書房，2018 年。
③松下佳代編著『＜新しい能力＞は教育を変えるか－学力・リテラシー・コンピテンシー－』ミネルヴァ書房，2010 年。
④篠原清昭編著『ポストモダンの教育改革と国家』教育開発研究所，2003 年。
⑤遅塚忠躬『史学概論』東京大学出版会，2010 年。
⑥Ministerium für Schule, Jugend und Kinder des Landes Nordrhein-Westfalen (Hrsg.): Richtlinien und Lehrpläne für die Grundschule in Nordrhein-Westfalen. Ritterbach Verlag 2008.
⑦Thüringer Ministerium für Bildung, Wissenschaft und Kultur (Hrsg.): Einschätzung zur Kompetenzentwicklung. 2010.
⑧Verband der Geschichtslehrer Deutschlands (Hrsg.):Bildungsstandards Geschichte (Sekundarstufe Ⅰ)Kompetenzmodell und Synoptische Darstellung der Kompetenzen und Verbindlichen Inhalt des Geschichtsunterrichts -Entwurf-. 2011.
⑨ Pandel, Hans-Jürgen: Geschichtlichkeit und Gesellschaftlichkeit im Geschichtsbewußtsein, in: von Borries, Bodo/Pandel, Hans-Jürgen/ Rüsen, Jörn (Hrsg.) Geschichtsbewußtsein empirisch. Centaurus-Verlagsgesellschaft 1991.
⑩Rüsen, Jörn: Geschichtsdidaktische Konsequenzen aus einer erzähltheoretischen Historik, in: Quandt, Siegfried/ Süssmuth, Hans(Hrsg.)Historisches Erzählen. Formen und Funktionen. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen 1982.
⑪ Körber, Andreas/ Schreiber, Waltraud/ Schöner, Alexander (Hrsg.): Kompetenzen historischen Denkens. ars una Verlagsgesellschaft 2007.
⑫Gautschi, Peter: Guter Geschichtsunterricht. Grundlagen, Erkenntnisse, Hinweise, 2.Aufl. Wochenschau Verlag 2011.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>宇都宮明子 | ４．巻<br>４２巻２号 |
| ２．論文標題<br>社会科学習指導要領におけるアウトカム志向への転換に関する考察－ＦＵＥＲ歴史意識プロジェクトのコンピテンス・モデルに基づいて－ | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>日本教科教育学会誌 | ６．最初と最後の頁<br>13-23 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>三島晃陽・原田信之 | ４．巻<br>26号 |
| ２．論文標題<br>「中学校の総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・マネジメント」 | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>『せいかつか＆そうごう』 | ６．最初と最後の頁<br>28-37 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>ペーター・ガウチ（著）原田信之・宇都宮明子（訳） | ４．巻<br>第29巻 |
| ２．論文標題<br>【翻訳】コンピテンス志向の歴史授業 －ペーター・ガウチ教授初来日記念講演会－ | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>名古屋市立大学人間研究科『人間文化研究 』 | ６．最初と最後の頁<br>227-250 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>宇都宮明子 | ４．巻<br>第2巻第１号 |
| ２．論文標題<br>歴史意識を育成する歴史教育論の構築に関する考察－日独の歴史教育学研究の検討を通して － | ５．発行年<br>2017年 |
| ３．雑誌名<br>『佐賀大学教育学部研究論文集』 | ６．最初と最後の頁<br>1-14 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>宇都宮明子 | ４．巻<br>第2巻第２号 |
| ２．論文標題<br>歴史意識を育成する歴史教育論に基づいた日本史授業開発－鎌倉時代の単元を事例に－ | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>『佐賀大学教育学部研究論文集』 | ６．最初と最後の頁<br>19-35 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>原田信之 | ４．巻<br>第58巻 |
| ２．論文標題<br>世界の学力調査―諸外国の学力ガバナンスと学力調査－第４回ドイツにおける学力調査－ | ５．発行年<br>2017年 |
| ３．雑誌名<br>Synapse | ６．最初と最後の頁<br>40-45 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>原田信之 | ４．巻<br>第18巻 |
| ２．論文標題<br>教科書通りではない教科書を創り続けてきた生活科教科書 | ５．発行年<br>2017年 |
| ３．雑誌名<br>教科書ファーラム | ６．最初と最後の頁<br>68-70 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>宇都宮明子 |
| ２．発表標題<br>スイスドイツ語圏における歴史教師のビリーフ研究に関する考察－日本でのビリーフ調査の実施に向けて－ |
| ３．学会等名<br>社会系教科教育学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

１．発表者名
白根奈巳・原田信之

２．発表標題
「シャラン&シャランのグループ・プロジェクトに焦点化した授業プログラム開発のための予備的研究－他者を尊重する行為の表現方法について－」

３．学会等名
日本学校教育学会

４．発表年
2018年

１．発表者名
白根奈巳・原田信之

２．発表標題
「グループ・プロジェクト法を用いた協同学習プログラムの開発－小学校、専門学校における実践と効果について－」

３．学会等名
日本協同教育学会

４．発表年
2018年

１．発表者名
宇都宮明子

２．発表標題
歴史意識を育成する歴史教育論の構築に関する考察 －日独の歴史教育学研究の考察を通して－

３．学会等名
日本社会科教育学会

４．発表年
2017年

１．発表者名
宇都宮明子

２．発表標題
歴史意識を育成する歴史教育論に基づいた日本史授業開発 －鎌倉時代の単元を事例に－

３．学会等名
全国社会科教育学会

４．発表年
2017年

１．発表者名
原田信之

２．発表標題
学力調査を生かしたカリキュラム評価のあり方－ドイツとの比較を通して－

３．学会等名
日本カリキュラム学会

４．発表年
2017年

１．発表者名
原田信之

２．発表標題
学習に何が最も効果的か－ジョン・ハッティ『可視化された学習』が示唆するもの－

３．学会等名
日本学校教育学会

４．発表年
2017年

〔図書〕　計6件

１．著者名
篠原　清昭、学校管理職養成研究会

４．発行年
2018年

２．出版社
ミネルヴァ書房

５．総ページ数
216

３．書名
学校管理職養成講座

１．著者名
原田 信之、田村 知子、森 久佳、冨田 福代、細尾 萌子、渡邊 あや、野澤 有希、池田 充裕

４．発行年
2018年

２．出版社
北大路書房

５．総ページ数
244

３．書名
カリキュラム・マネジメントと授業の質保証

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Ｈ.Ｊ.パンデル著、原田信之監訳、宇都宮明子訳 | ４．発行年<br>2017年 |
| ２．出版社<br>デザインエッグ | ５．総ページ数<br>253 |
| ３．書名<br>ＰＩＳＡ後のドイツ歴史教授学 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>原田智仁、關浩和、二井正浩（編著） | ４．発行年<br>2017年 |
| ２．出版社<br>風間書房 | ５．総ページ数<br>316(13-22) |
| ３．書名<br>教科教育学研究の可能性を求めて | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>今村光章（編著） | ４．発行年<br>2016年 |
| ２．出版社<br>法律文化社 | ５．総ページ数<br>220（132-148） |
| ３．書名<br>環境教育学の基礎理論―再評価と新機軸― | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>日本学校教育学会編 | ４．発行年<br>2016年 |
| ２．出版社<br>学事出版 | ５．総ページ数<br>205（110-111） |
| ３．書名<br>これからの学校教育を担う教師を目指すー思考力・実践力アップのための基本的な考え方とキーワード | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 原田　信之<br>(Harada Nobuyuki)<br>(20345771) | 名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授<br>(23903) | |